

マルコによる福音書 11章 12節～19節

2017年9月28日

古本 靖久

1、聖歌 337番 「山々刻みて 星空かざる」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 84 ページ）

4、テキストの位置

前回、イエス様と弟子たちは、エルサレムに入りました。群衆が「ホサナ、ホサナ」と叫ぶ中、イエス様は子ろばにまたがり、何も語りませんでした。

エルサレムにて	日曜日	11:1-6	神が備えたもの
		11:7-11	群衆の歓喜とイエスの沈黙
	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	権威について
		12:1-12	ぶどう園と農夫のたとえ
		12:13-17	神のものは神へ

今日の箇所は、その

翌日の物語です。前回お話ししたように、マルコによる福音書はエルサレム入城から受難・復活までを一週間の出来事として描きます。その影響で、後代のキリスト教会では、復活日までの一週間を「聖週（受難週、聖週間、Holy Week）」として大切にしていきます。

またいちじくの話は、マルコ福音書では神殿から商人を追い出す話を囲い込むように、前半と後半に分かれています。（ちなみにマタイでは、神殿→いちじく前半→いちじく後半となっており、ルカにはいちじくの話は出てきません）。これはマルコ福音書に特徴的な「サンドイッチ形式」と呼ばれるもので、ベルゼブル論争（3:20～35）やヤイロの娘（5:21～43）にも見られます。

サンドイッチ形式によって、いちじくの話と神殿での出来事とが密接に結び付けられます。強調点を明らかにするのがその狙いですが、では今日の箇所では聖書は、何を伝えようとしているのでしょうか。

5、節ごとに

◆いちじくの木

11:12 (そして) 翌日、一行(彼ら)がベタニアを(から)出る(てきた)とき、イエス(彼)は空腹を覚えられた。

イエス様たちはベタニアとエルサレムを毎日行き来していました。他の福音書によると、ベタニアには重い皮膚病のシモンの家や、マリア、マルタ、ラザロたちが住んでいた家があったようです。

イエス様はその道の途中、空腹を覚えます。実はこの部分と次節の「いちじくの季節ではなかった」を削除しようとする考えがあります。それはイエス様が空腹でイライラし、いちじくの木に八つ当たりしたという図式があまり好ましくないからです。

ところで一緒にの行動をとっていた弟子たちは、お腹は空いていなかったのでしょうか。

11:13 そこで(そして)、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、(彼は)実がなっていないか(何か見つかるか)と(そこに)近寄られたが、(ここに来て)葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。

いちじくの木は、旧約聖書の中に多く登場します。しかしあまりいい意味で用いられてはいません。

- ・ぶどうの木にぶどうはなく いちじくの木にいちじくはない。葉はしおれ、わたしが与えたものは 彼らから失われていた。(エレミヤ書8章13節)
- ・ぶどうの木は枯れ尽くし、いちじくの木は衰え ざくろも、なつめやしも、りんごも 野の木はすべて実をつけることなく 人々の楽しみは枯れ尽くした。(ヨエル書1章12節)
- ・悲しいかな わたしは夏の果物を集める者のように ぶどうの残りを摘む者ようになった。もはや、食べられるぶどうの実はなく わたしの好む初なりのいちじくもない。(ミカ書7章1節)
- ・荒れ野でぶどうを見いだすように わたしはイスラエルを見いだした。いちじくが初めてつけた実のように お前たちの先祖をわたしは見た。ところが、彼らはバアル・ペオルに行った。(ホセア書9章10節)

これらの言葉は、旧約の預言者がいつまでも神さまに背き続けるイスラエルの人々を嘆き、語った言葉です。つまりいちじくの木はイスラエルの象徴だと考えることができます。したがってこの物語は、イエス様が短気を起こしたというものではなく、イスラエルに対する神さまの審判を象徴的に示しているのです。

11:14 (そして) イエス(彼)はその木に向かって(こたえて)、「今から後いつまでも(永遠に)、お前から(誰も)実を食べる者がないように」と言われた。(彼の)弟子たちはこれを聞いていた。

イエス様がエルサレムについたのは過越祭の直前でした。過越祭の季節は、春分に近い頃でした。復活日が3~4月におこなわれることを考えると、この出来事の時期がある程度想像できると思います。

いちじくの季節は夏で、春に実をつけていないのは当然だそうです。ですからイエス様がいちじくに呪いの言葉を吐いたことは、常識的に考えておかしいことです。実際この物語を普通に読んだら、とても嫌な気分になりませんか。



しかし先ほど説明したように、イスラエルをいちじくの木に置き換えて、イエス様が語っていたらどうでしょうか。イエス様は、こう嘆いているのではないのでしょうか。

「イスラエルの民よ。なぜあなたたちは神に立ち返らなかったのか。いちじくの木が実をつける季節を逃してしまったように、その時期を逸してしまったのか」。

<ここまでの箇所から>

この「いちじくの木」の物語は、イエス様がエルサレムに入られて十字架につけられる間になされた唯一の奇跡です。また福音書に登場する、イエス様がなされたただ一つの破壊的な奇跡でもあります。

日本聖公会の聖餐式聖書日課では取り上げられないことがないため、この箇所を聞いたことがない方も多いかもかもしれません。実際こうして解説を聞かないとイエス様の奇妙な行動だけが目立ってしまい、マルコ福音書が伝えたかったことが正しく届かなくなります。

エルサレムに入ったイエス様は、嘆いておられました。葉が茂り、一見華やかに見えるいちじくの木が肝心の実をつけていないように、神さまに従い、敬虔に歩んでいるかのように見えるイスラエルの民も、本当の信仰の実をつけていないのです。

続いて物語は神殿での様子にうつります。このいちじくがどうなったのか、それは次回読まれる、次の日の出来事の中で報告されます。

◆神殿とは

11:15 それから（そして）、＝行（彼ら）はエルサレムに来た（る）。（そして）イエス（彼）は神殿の境内に入り、そこ（神殿の中）で売り買いしていた（する）人々を追い出し始め、（そして）両替人の台（机）や鳩を売る者の腰掛け（椅子）をひっくり返された。

場面はエルサレム神殿に移ります。商人は「異邦人の庭」と呼ばれる場所で、売り買いをしていました。この行為自体には、違法性や悪い要素はなかったようです。というのも、両替人も鳩を売る者も、神殿には必要だったからです。

まず両替人ですが、彼らは世間に流通している貨幣を、神殿に献納できるものに両替する商売をしていました。この頃、ローマ帝国や帝国に支配されていた地域で使われていた貨幣には、異教の神々の像や皇帝の肖像が彫られていました。

十戒で偶像をつくることを禁じられていたユダヤの人たちが、その貨幣を神殿に納めることはできません。そのため、古いヘブライ貨幣やティルス貨幣といった、ユダヤで使われていた通貨に換金することは不可欠でした。

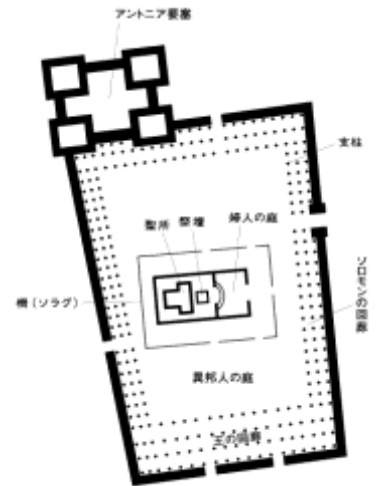
また神殿に動物の犠牲をささげるとき、遠くから動物を連れてくるのは大変です。犠牲にすることのできる動物は、傷などがなかったことが求められていました。したがって家から連れてきた動物の適格性を検査するよりも、境内で検査済みの動物を購入する方が楽だったので、実際記録には、過越祭の期間に一人の商人が3000頭の羊を売っていたというものもあります。

商売によって、多少の利益は得ていたことでしょう。中には暴利をむさぼる商人もいたかもしれませんが、イエス様はそのことを強烈に批判しているのでしょうか。

11:16 また、境内（神殿）を通って物（器物）を運ぶこともお許しにならなかった。

この16節の言葉は神殿そのものを批判しているといえますが、これはマルコ福音書にしかありません。ユダヤ人の多くいたマタイの教会では神殿そのものを批判できなかったのでしょう。16節を省き、批判の対象を神殿で商売する人たちに向けています。

しかしイエス様は商売だけでなく、神殿の他の行為も許していません。つまり「神殿で商売するな」ということではなく、神殿のあり方自体を批判しているのです。



ヘロデの神殿の見取り図

11:17 そして、人々に教えて（彼らに）言われた。「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の（民族のための）祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちは それを強盗の巣にしてしまった。」

このイエス様の言葉は、旧約の預言者の言葉を思い起こさせます。

・わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。（エレミヤ書7章11節）

本来、神殿はすべての民族のための祈りの家だったはずですが。この「すべての民族」という言葉は、「異邦人」という意味が強い語です。

イザヤ書には次のような言葉があります。

・また、主のもとに集って来た異邦人が 主に仕え、主の名を愛し、その僕となり 安息日を守り、それを汚すことなく わたしの契約を固く守るなら わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き わたしの祈りの家の喜びの祝いに 連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。（イザヤ書56章6～7節）

イエス様が足を踏み入れた神殿は、本来の機能を果たしていない、形だけが荘厳なものでした。それはまるで、葉が茂るばかりで実をつけることのできないいちじくの木のようにでした。

イスラエルの人々が神さまから期待されていたこと、それは「異邦人の光」となることでした。しかし神殿はユダヤ人の支配層によって閉鎖的なものとなっていきます。民族的にも宗教的にも排他的になっていく彼らを、イエス様は批判しているのです。

神さまの恵みを、自分たちだけでむさぼる姿を、イエス様は「強盗の巣」と呼びます。神殿は犠牲をささげるためだけの場所ではありません。すべての人を受け入れ、共に祈る場所であるのです。

11:18 （そして）祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエス（彼）をどのようにして殺そう（滅ぼそう）かと謀った（探った）。（なぜなら彼らは彼のことを恐れたからである。）群衆が皆その教えに打たれていたのも（驚嘆していたからである。）
~~、彼らはイエスを恐れたからである。~~

神殿の統括者である祭司長たちや律法学者たちは、このイエス様の言葉を自分たちへの攻撃であると理解しました。

しかし群衆が驚嘆する姿をみて、彼らの行動は翌日以降に持ち越されていきます。彼らはイエス様を滅ぼそうと考えます。自分たちのあり方を批判されたことで、その怒りは頂点に達してしまうのです。

11:19 (そして) 夕方になると、イエスは弟子たちと(彼らは)都(町)の外に出て行かれた。

こうして「月曜日」が終わりました。イエス様はまた、エルサレムから出て行きます。

<今日の箇所から>

いちじくの木も神殿も、外観は素晴らしいものでした。しかし青々とした葉が雄大に風に揺れるいちじくの姿は翌日には枯れ果て、天上までそびえたつ神殿も崩壊していきます。

イエス様が批判されたのは、どのようなことだったのでしょくか。いちじくの木は、通りかかった人にその実を提供しませんでした。栄養である神さまの恵みを、自分の中だけに閉じ込めてしまったのかもしれない。



また神殿がすべての人に開かれていない姿に、イエス様は怒りをぶつけられました。その後、神殿はなくなり、神さまの恵みはすべての人に向けられていきます。

この物語を読むとき、わたしたちが大切にしている教会が、いつの間にかイエス様が批判したいちじくの木や神殿のようになっていないか、振り返ってみたいと思います。教会は神さまから与えられた恵みを自分たちだけのものにせず、周りの人たちと分かち合っているでしょうか。教会はすべての人に開かれた、祈りの家になっているでしょうか。

神さまがわたしたちに求めていることは何なのか、考えながら歩むことが大切なのではないでしょうか。

今回の学びはこれで終わります。次回は10月26日(木)10時30分からです。「信仰と祈り、権威について」(マルコ11:20~33)について学んでいきます。